

# 慶滋保胤六波羅蜜寺供花会詩序考

——勸学会詩序との関連において——

吉原 浩人

## 一 はじめに

勸学会<sup>①</sup>の実態を説明する上で、直接勸学会について記された詩文はもちろんであるが、関連する作品にも目を向ける必要がある。勸学会の中心人物であった慶滋保胤が、毎年三月に六波羅蜜寺において開催されていた結縁供花会において、勸学会や極楽会において、講經の後に詩をもつて仏を讀ずるのに、供花会においてどうして行われなかったかと問いかけ、満座の許諾を得て詩会を併催したという。その詩序が、『本朝文粹』卷十「二七六」に収載される「七言暮春於六波羅蜜寺供花会」聴講<sup>②</sup>法華經<sup>③</sup>同賦<sup>④</sup>一称<sup>⑤</sup>南無仏<sup>⑥</sup>である。

六波羅蜜寺の結縁供花会においては、四日間の法華八講が修されていた。限られた結衆のみで一日だけ行われる勸学会と比べ、かなり大規模な講会である。貴賤上下を問わず、大勢の善男善女が結縁のために参集したことが、本文中に記されている。六波羅蜜寺は、当時天台宗の傘下にあつたため、法華八講が行われたのであろう。

この詩会の句題は「一称南無仏」で、人が乱れた心を持っていたとしても、塔廟の中に入り、ただ一度だけ「南無仏」と称えさえすれば、仏道を成ずることができたとする、『法華経』方便品の著名な偈文にある。勧学会の句題も、すべて『法華経』の経文から採られており、保胤は、供花会においても、勧学会と同様の方法で詩序を撰述したと考えられる。すなわち、勧学会研究を進めるために、この供花会の詩序は、勧学会の詩序群と同等に扱われなければならない、重要な作品なのである。

小稿においては、本詩序を仏教思想史の中に位置づける前提として、保胤がこの句題をどのように展開させたか、また詩序全体がどのような経文や詩文を典拠にしているかを詳細に分析し、その作文方法について検証することを目的とする。

## 二 詩序の本文

『本朝文粹』に収載される、慶滋保胤の六波羅蜜寺結縁供花会詩序の全文を以下に掲げる。①②③の分段は私に行った。文章構造・訓読・現代語訳・註釈については、別稿<sup>②</sup>に公表した。本来一体の論考であるため、一々の典拠の詳細、使用テキスト等については別稿にゆだね、以下では省略した。『白氏文集』『本朝文粹』については、巻数を省略して作品番号のみ表示しているので、別稿を併せ参照していただければ幸いである。

七言暮春於六波羅蜜寺供花会「聴講」法華経「同賦」一称「南無仏」

①夫六波羅蜜寺者、空也聖者權與之、中信上人潤色焉。如此兩人者、寧非奉如來勅、為如來使、來此娑婆世界、度于濁惡衆生乎。於是每日講妙法一乘、每夜修念仏三昧。彼南北二京之名德日來、通為講師、通為聽衆、東西兩都之男女雲集、即合十指即致寸心。開講已垂八九載、結縁不<sub>レ</sub>知幾万人。何況展隨喜之功德、漸々廻向之薰修乎。暮春三月、百花争開、別修四日八講、号結縁供花会。其一日為導一切男子、二日為度一切女身、三日為<sub>レ</sub>濟一切童子、四日為<sub>レ</sub>化一切僧侶也。大哉誓願、無得而稱之。当此時也、縑素相語曰、世有勸学会、又有極樂会。講經之後、以詩而讚<sub>レ</sub>仏。今此供花之会、何無歎<sub>レ</sub>仏之文哉。満座許諾、誰人間然。

②便以<sub>レ</sub>經中一称南無仏一句、抽為<sub>レ</sub>題目。往昔無信心、無善心、其心或乱心、不<sub>レ</sub>再称不<sub>レ</sub>三称、其称只一称。彼人莫<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>成仏、莫<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>得道。

③嗟乎我党一心無<sub>レ</sub>餘心、千唱又万唱。脱此凡身、登<sub>レ</sub>于覺位、且何疑哉、何疑哉。中有<sub>レ</sub>垂白髮一紵、朱衫一者。身暫雖<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>柱下、心尚如<sub>レ</sub>住<sub>レ</sub>山中。少壯之年愁詠一事一物、強求<sub>レ</sub>名聞、衰暮之日或記<sub>レ</sub>蕪詞狂句、將<sub>レ</sub>撰<sub>レ</sub>菩提。今日推為<sub>レ</sub>唱首、不<sub>レ</sub>敢再辞。聊述<sub>レ</sub>大綱、備<sub>レ</sub>於後事、云爾。

### 三 第一段…六波羅蜜寺供花会の由縁

詩序は、三段からなる構成を基本とする。本詩序第一段では、六波羅蜜寺の創建から説き起こし、供花会の様相と詩会の由縁を説く。第二段は、句題「一称南無仏」を敷衍する部分である。第三段では、慶滋保胤が自らを省みつつ、同心の者とともに来世には覺りに至りたいと願う。

第一段では、まず六波羅蜜寺が空也<sup>3</sup>によって創建され、中信によって中興されたことを述べ、この兩人の功績を讃える。六波羅蜜寺の前身は、空也が創建した西光寺であるが、これについては、『六波羅蜜寺縁起』<sup>4</sup>冒頭に次のようにいう。

夫六波羅蜜寺者、空也上人応和年中所<sup>2</sup>草創<sup>1</sup>也。本号<sup>2</sup>西光寺<sup>1</sup>。上人以<sup>レ</sup>厭<sup>2</sup>下界<sup>1</sup>、願<sup>2</sup>西土<sup>1</sup>也。上人入滅之後、大法師中信来<sup>2</sup>住此寺<sup>1</sup>、專修<sup>2</sup>衆善<sup>1</sup>、兼行<sup>2</sup>六度<sup>1</sup>、改<sup>2</sup>本名<sup>1</sup>更号<sup>2</sup>六波羅蜜寺<sup>1</sup>。

《いったい六波羅蜜寺は、空也上人が応和年中に草創したものなのです。もとは西光寺と名付けられておりました。上人は娑婆世界を厭われ、西方極樂浄土を願われたからなのです。上人が入滅なさったのち、大法師中信がこの寺に來られ留まられて、専ら衆生のための善行を修し、兼ねて布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の六波羅蜜を行ぜられたので、もとの寺名を改めて六波羅蜜寺と名付けられたのです》

この縁起は、保安三年（一一二二）に三善為康が撰述したとされ、本詩序より後の成立となる。空也の行業については、同時代の源為憲『空也誄』や、保胤自身の『日本往生極樂記』空也伝で知ることができるが、中信の伝は他にほとんど記録がない。この詩序では、六波羅蜜寺創建の空也と中興の中信の二人が、如来の勅命を奉じた使者となつて、娑婆世界に來臨し濁惡世の衆生を化度したのだとする。

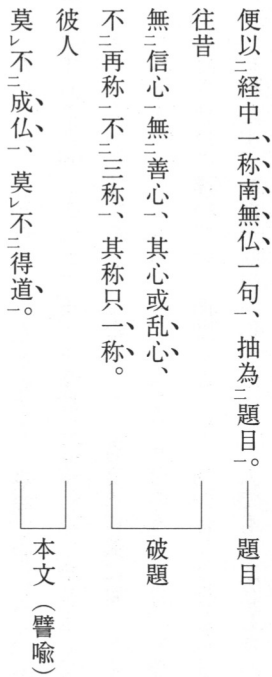
次いで、供花会の次第について話題が移る。この法会は、花が競つて咲く春たけなわの三月に、四日間毎日二座の法華八講を行い、夜ごとに念仏三昧を修すというものである。その一日目はすべての男性を導くため、二日目はすべての女性を度すため、三日目はすべての子供を濟うため、四日目はすべての僧侶を化すために、南北両京の各宗派の高僧が、たがい高座で説法し、たがい聴衆となつたため、善男善女が雲集したという。供花会を創始してから、七、八年になるが、その間の結縁者は幾万人かわからないほどで、法要に隨喜する功德や、



廻向による薰習は計り知れないという。しかし、講經ののち、仏を詩や文章で褒め讃える者はいなかったため、勸学会や極楽会では仏を讃歎するのに、どうしてこの法会にはないのだろうかと保胤が問いかけ、満座の許諾を得て詩会を催すことになったのだと、その由来を記すのである。

#### 四 第二段…破題の方法

第二段では、句題詩の規則に準じ、題目・破題・本文（譬喩）の順に、句題を敷衍することが通例となっている。ところが、この句題「一称南無仏」の破題は、いささか異例のものとなっている。以下に、この部分を構造分析したものを掲げる。



この句題は、次の『法華經』方便品の偈文に拠っている。

若人散乱心、入<sup>二</sup>於塔廟中<sup>一</sup>、一<sup>レ</sup>称<sup>二</sup>南無仏<sup>一</sup>、皆已成<sup>二</sup>仏道<sup>一</sup>。

方便品の後半にある長い偈文の一節で、過去世において、諸仏が一乗の教えを説き、救済したことを述べる場面である。人が乱れた心を持っていたとしても、塔廟の中に入り、たった一度だけ「南無仏」と称えさえすれば、仏道を成ずることができたとする。日常的に破戒行為を繰り返している不逞の輩にとつては、まことに有り難い文句であろう。そこまでの悪人でなくとも、詩文の修飾に腐心する文人たちにとつては、心の支えとなり、拠り所とすべき偈文の一つである。今回の八座の講会のうちには、方便品のこの箇所も、演題の一つとして大衆に向かつて講説されたに違いない。保胤はここで、過去世より信心もなく善心もなく、乱れた心を持ち、二度・三度さえ仏号を称えず、ただ一回のみ称えただけの人でも、成仏しない者はなく、悟りを得ないものもないと説くのである。

詩序第二段では、題目で句題の語をすべて詠み込み、破題と本文（譬喩）で対句を用いて句題を敷衍展開しなければならぬ。「一称南無仏」の五文字を、別の表現で言い換える、詩序中に最も技巧を問われる箇所である。ところがここでは、ほぼ『法華経』にある語句のみによつて、全体が構成されている。最初の漫句で、句題「一称南無仏」をそのまま使用するのとは型通りであるが、続く破題・本文ではそれを、さまざまな典故を駆使して同義語で言い換えなければならない。ところがこの破題では、「一称」の語をそのまま使用してしまっている。

ではここで、どのように句題を敷衍しているのだろうか。前引方便品の偈文から、「乱心」「一称」「成仏」の語をそのまま抜き出していることに、まず気付く。隔句対二句目おわりの「乱心」からは、その上の「信心」「善心」「其心」が導き出されるが、「信心」は『法華経』開経の『無量義経』、「善心」は『法華経』法師品・妙音菩薩品、「其心」は序品にそれぞれみられる語である。同四句目おわりの「一称」からは、「再称」「三称」「其

称」が引き出される。「其称」のみ『法華經』普門品にあり、他は同經に見られないが、数字を変えただけのものである。本文（譬喩）冒頭の部分の「彼人」は、『觀無量壽經』にある。「成仏道」は方便品の偈文にあるが、ここから同義語である「得道」という『法華經』譬喩品にある語を導いている。つまり第二段の破題部分では、『法華經』『無量義經』『觀無量壽經』という、法会参加者ならば誰でも知っている經典の語句のみ用いていることになる。この飾りのない簡潔な表現は、私が近年論じてきた勸学会の詩序における、仏教經典と中国古典が渾然一体となった巧妙な表現の位相とはほど遠い。

## 五 第三段…後世への願い

第二段では、『法華經』方便品の、ただ一度「南無仏」と称えただけで成仏した者について述べていた。これに対して第三段では、我が党の仲間達は、一心に浄土を願って他念なく、千回も万回も称えているのだから、覺位に登らないことがあるうかとする。ここで「我党」というのは、慶滋保胤とともに、若年の頃から勸学会に集った結束を多く含んでいる。保胤は、勸学会所専用の堂舎建立勸進のための牒や奏状で、「党結」という語を使用している<sup>6</sup>。

その中に、一人白髪朱衫の者がおり、身は内記の職にありながら、心は山林に住し仏道修行をしているようだと、自らについて述べる。若き日には、出世意欲に燃え名聞利養を求めていたが、年老いた現在では、蕪詞狂句を記しながら菩提を求めていると、人生を省みるのだ。本日は、仲間から推挙されて詩序の作者となったが、敢えて二度辞退することはしなかったといい、後世菩提に備えようというのである。この第三段に用いられた表現

技巧については、後述する。

四〇

## 六 『法華經』と『妙法蓮華經玄贊』

本詩序の句題は『法華經』方便品から採られているが、法師品の語の使用も目立っている。「如来使」「隨喜」「善心」は、いずれも近接している箇所であり、「讚仏」もそれに続く偈文にある。

如<sub>レ</sub>是等類咸於<sub>二</sub>仏前<sub>一</sub>、聞<sub>二</sub>妙法蓮華經一偈一句<sub>一</sub>、及至一念隨喜者、我皆与<sub>二</sub>授記<sub>一</sub>。（中略）若是善男子善女人、我滅度後、能竊為<sub>二</sub>一人<sub>一</sub>說<sub>二</sub>法華經一乃至一句<sub>一</sub>。当<sub>レ</sub>知是人、則如来使、如来所<sub>レ</sub>遣、行<sub>二</sub>如来事<sub>一</sub>。何況於<sub>二</sub>大衆中<sub>一</sub>広為<sub>レ</sub>人說。藥王、若有<sub>二</sub>惡人<sub>一</sub>以<sub>二</sub>不善心<sub>一</sub>。於<sub>二</sub>一劫中<sub>一</sub>現<sub>二</sub>於仏前<sub>一</sub>。常毀<sub>二</sub>罵仏<sub>一</sub>其罪尚輕。

第三段に「一事一物」という表現があるが、傍線『法華經』の「一偈一句」「一乃至一句」はこれに類似する表現で、後述する白居易の「一時一物」とともに、意識していよう。句題「一称南無仏」の「一」を、本詩序の他の箇所でも意識して多用する。

ここの「如来使」から、『涅槃經』にある「如来勅」を導き出したのであろう。また、『法華經』に多く使用される「娑婆世界」の対となる「濁悪衆生」は、『観仏三昧海經』などにある。

この詩序に特徴的なのは、基『妙法蓮華經玄贊』（以下『法華玄贊』）を受容していることである。基は、玄奘の弟子で、慈恩大師と尊称され、雁塔は西安興教寺の玄奘塔の脇にある。『成唯識論』の註釈である『成唯識論述議』を撰述するなど、唯識説の研究で知られ、道宣とも交流があった。本朝の法華八講は、南都の勤操の遺徳を慕い、延暦十二年（七九三）に創始されている。実はこの八講の由来を記した「法華八講縁起」には、『法華

玄賛』が多く引用されている。<sup>⑦</sup>本書は、主に法相宗で使用される『法華経』の注釈書であるが、慶滋保胤のこの詩序にも、『法華玄賛』を出典とする語がいくつか見られる。勧学会は天台僧と文人の閉じられた空間であるが、法華八講には南北両都の名僧が集い、貴賤上下・善男善女が結縁する。保胤は、興福寺をはじめとする法相宗の宗侶たちにも氣を配っているであろう。

「妙法一乗」「題目」の語は、他に用例が少ないが、いずれも『法華玄賛』巻一本にある。「妙法一乗」は、『観無量寿経』にある「念仏三昧」と対になっている。句題を「題目」とするのは、紀長谷雄・菅原文時・紀育名の詩序にも用例があるが、いずれも『法華玄賛』を淵源とする表現であろう。

「聴衆」「結縁」「緇素」「覚位」は、一般的な仏教語のように見えるが、やはり『法華玄賛』巻一本あるいは末に見える語で、近接した箇所用いられている。

第三段落はじめの緊句、

脱此凡身、登于覚位、

の「凡身」は巻七末にあり、保胤はこの対句を『法華玄賛』に拠って作成したことが明らかである。

紀育名や大江以言の勧学会詩序では、『摩訶止観』『法華玄義』『法華文句』『法華文句記』『止観輔行伝弘決』など、智顗の述作とその註釈書、すなわち天台宗の文献を多く使用している。<sup>⑧</sup>これは勧学会が天台宗の法会であるから当然であるのだが、今後は法相系の文献についても、さらなる検証が必要となろう。なお、院政期の大江山房は、基の著作を積極的に取り入れている。匡房は「大唐大慈恩寺大師画讃」<sup>⑨</sup>を撰述し、興福寺や春日社との関係により、『成唯識論』など法相宗の所依の論疏の研究を行っている。白河院の「金字一切経供養御願文」において、基『成唯識論掌中樞要』を使用していることについては、すでにその訳註で指摘している。<sup>⑩</sup>

## 七 白居易詩文の受容1…第一段

第一段冒頭の長句で使用される「権輿」「潤色」は、ともに非常に固い言葉で、仏会の詩序に使用する語として、違和感を覚える。このうち「権輿」の典拠は、『詩経』秦風であり、さらに楊雄「羽獵賦」(『文選』)にも引かれている。

この語を、白居易は「中和節頌」[「四九三」]で次のように使用する。

権輿<sup>一</sup>、胚渾、玄黄既分、煦嫗<sup>二</sup>細嫗、肇生<sup>三</sup>蒸民。天命<sup>四</sup>聖神、是為<sup>五</sup>大人<sup>一</sup>。

これは、唐の徳宗が制定した中和節を白居易が讃えたもので、『周易』『尚書』『礼記』『周礼』『詩経』『文選』などの語をちりばめた頌の冒頭に、白居易はこの語を用いている。「潤色」は、『論語』憲問にあり、班固「兩都賦序」(『文選』)にも踏まえられるが、「賦賦」という、白居易の最も重要な文章論の中にも使われている。

況賦者、雅之列、頌之儔、可<sup>三</sup>以潤<sup>二</sup>色<sup>一</sup>、鴻業<sup>一</sup>、可<sup>三</sup>以発<sup>二</sup>揮<sup>一</sup>皇猷<sup>一</sup>。

ここで、賦という文体が、雅とならび、頌の仲間であって、天子の大きな仕事に色を加えるものであり、皇帝のはかりごとを発揮するのだとする。

つまりここで、慶滋保胤がこれらの語を選択したのは、『詩経』『論語』などの経書や『文選』にあることを承知しつつ、白居易の詩文に利用されていることが大きな理由となつていよう。

次に白詩語が固まって使用されるのは、第一段の「南北二京」ではじまる密隔句である。

南北二京之名<sup>一</sup>、徳<sup>二</sup>、日<sup>三</sup>、来<sup>四</sup>、通<sup>五</sup>、為<sup>六</sup>講師<sup>一</sup>、通<sup>二</sup>、為<sup>三</sup>聴衆<sup>一</sup>。

東西両都之男女雲集、即合二十指、即致一寸心。

この傍点部は、いずれも白居易の詩文に見え、またこれに続く次の部分も同様である。

開講已垂三八九載、結縁不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>幾万人<sub>一</sub>。

何況

転展随喜之功徳、漸々廻向之薰修乎。

詳細については、別稿の註釈を参照されたい。

さらに白詩語を、保胤は第一段の最後の部分にも使用している。

講經之後、以<sub>レ</sub>詩而讚<sub>レ</sub>仏。

今此供花之会、何無<sub>二</sub>歎<sub>レ</sub>仏之文<sub>一</sub>哉。

満座許諾、誰人間然。

ここで重要なのは「以<sub>レ</sub>詩」という表現である。「与<sub>二</sub>元九<sub>一</sub>書」「二四八六」に、次のようにいう。

然千百年後、安知復無<sub>下</sub>如<sub>二</sub>足下<sub>一</sub>者出而知<sub>中</sub>愛我詩<sub>上</sub>哉。故自<sub>二</sub>八九年來<sub>一</sub>、与<sub>二</sub>足下<sub>一</sub>小通則以<sub>レ</sub>詩相戒、小窮則以<sub>レ</sub>詩相勉、索居則以<sub>レ</sub>詩相慰、同处則以<sub>レ</sub>詩相娛。知<sub>レ</sub>吾罪<sub>レ</sub>我、率以<sub>レ</sub>詩也。

白居易は、有名な元稹に与える書状の末尾において、何千何百年後にあなたのように我が詩を愛する者が出るかどうかかわらないのだから、ここ八九年来、あなたと詩をもつて誠め合い、勉め合い、慰め合い、楽しみ合ってきた、しかし我が罪を得たのもまた詩をもつてのゆえなのだ、と述懐する。ここで「以<sub>レ</sub>詩」と五回も繰り返し、保胤もこの語に仏を讃歎する、強い思いを込めている。さらに、供花会開講以来「八九載」を重ねたと回顧していたが、これも実は「与<sub>二</sub>元九<sub>一</sub>書」の「八九年」に基づいた表現なのである。

## 八 白居易詩文の受容2…第三段

慶滋保胤の面目躍如たる部分は、第三段落の「且」以下の部分である。

且

何疑哉、何疑哉。

中有下垂、白髮、紆、朱衫者。

身暫雖、在、柱下、心尚、如、住、山中。

少壯之年、愁、詠、事、一物、強求、名聞、

衰暮之日、或、記、蕪詞狂句、將、撰、菩提。

今日推為、唱首、不、敢、再、辭。

聊述、大綱、備、於、後事、

云爾。

傍点部は、すべて白居易の詩文に見える語であるが、保胤は確実にそれを参照している。主な部分について、以下に論証していきたい。

「重到渭上旧居」〔〇四二三〕は、白居易が十年ぶりに渭水のほとりの自宅に帰り、人生の無常に思いをいたし、我が身をかえりみる詩である。

浮生同「過客」、前後遞、来去、白日如「弄珠」、出沒光不「住」、人物日改変、拳「目悲」、所「遇」、廻念「念我身」、安



得<sub>レ</sub>不<sub>二</sub>衰暮<sub>一</sub>、朱顔銷不<sub>レ</sub>歇、白髮生無數、唯有山門外、三峰色如<sub>レ</sub>故

この詩に、白髪となり初老となった保胤は、自らの境遇を重ね合わせている。傍点部はすべてこの詩序にある語彙なので、参照していたことは疑いない。ここで白居易が使用する「衰暮」、すなわち衰え年老いるという語は、次の保胤の雑隔句に見えるが、白居易の「画<sub>二</sub>西方<sub>一</sub>幀記」[三六〇五]にも、次のようにある。

白居易、当<sub>二</sub>衰暮<sub>一</sub>之歳、中風痺之疾、乃捨<sub>二</sub>俸錢三万<sub>一</sub>、命<sub>二</sub>工人杜宗敬<sub>一</sub>按<sub>二</sub>阿弥陀・無量寿<sub>一</sub>二經<sub>一</sub>、画<sub>二</sub>西方世界<sub>一</sub>一部。

「画<sub>二</sub>西方<sub>一</sub>幀記」が、勸学会に大きな影響を与えたことについては、前稿ですでに論証した。<sup>12)</sup>「衰暮」は白詩に三例しかないが、保胤はこの語を効果的に使用している。

次に、「紆<sub>レ</sub>朱」の語は、「歳暮寄<sub>二</sub>微之<sub>一</sub>三首、其二」[二四五]にある。

白、頭歳暮、苦相思、除<sub>二</sub>却悲吟<sub>一</sub>無<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>（中略）若並如今是全活、紆<sub>レ</sub>朱拖<sub>レ</sub>紫且開眉

朱衣をまとうという語のみならず、「白頭」という「白髪」の同義語が使用されているので、これも参看しているはずである。ただし、白居易の朱衣は最高位のもので、元稹と私はようやくここまで官位が至ったのだという一種の達成感を述べたものである。ところが、大内記の保胤は従五位下であり、かろうじて朱衫着用の身分に引つかかっているにすぎない。彼我の朱の衣の意味はまったく異なるのである。

「山中」の語は、白居易「山中独吟」[〇三三〇]に、次のようにある。

自<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>江上客<sub>一</sub> 半在<sub>二</sub>山中<sub>一</sub>住

江州に流謫の身となり、半ば山中すなわち廬山草堂に住していると詠ずる。白居易に「山中」の用例は三十数箇所あるが、おそらくここは、この詩を意識しているのではないかと考える。この詩の冒頭には、次のようにいう。

## 人各有癖 我癖在章句

人にはそれぞれ一つの嗜好があるが、我が癖は詩の章句にあるのだと、白居易は詩文への偏愛やみがたいことをいう。ここに、保胤が狂言綺語の誤ちから、なかなか逃れられないことに重ね合わせているとは考えられないだろうか。保胤の狂言綺語観については、すでに論じたが、「香山寺白氏洛中集記」〔三六〇八〕などで、今生に世俗で作成した文筆を因として、それを翻して来世における讃仏の縁としたいと述べる白居易の言葉は、勧学会結衆の拠り所であったからである。なお、「山中」の語は、紀齊名の勧学会詩序を論じた中でも指摘したが、『法華文句』卷一上にも「今処山中、説中道也」とある。この山は、釈尊が『法華経』を説いた靈鷲山である。保胤が俗塵にまみれながら、心はなお山中に住していると述べるのは、釈迦説法の靈鷲山や白居易廬山草堂への憧れもあろうが、来世において前世を記憶する善友とともに菩提を目指したいと、保胤が勧学会詩序で述べていたことも重ね合わせていよう。

「一事一物」は、さきにも引いた「与三元書」〔一四八六〕の、以下の部分を踏まえていよう。

其餘雜律詩、或誘於一時一物、發於一笑一吟、率然成章、非平生所尚者。

ここで「一時」と「一事」は異なるが、『汎渭賦』〔一四〇九〕には、次のようにある。

備一官而無一事、又不維而不繫

保胤は、句題「一称南無仏」の「一」を、本詩序では十二回も重ねて展開するのである。

「狂句」は、白居易の「後序」〔二一九三〕にある。

是時大和二年秋、予春秋五十有七、目昏頭白、衰也久矣。拙音狂句、亦已多矣。

ここには本詩序で重要な、「白」と「衰」の語もあるので、これも確実に踏まえていよう。「狂句」とはすなわち

狂言綺語のことであるが、これについては既に述べた。その他傍点部分は、すべて白居易の詩文に見られるので、別稿の註釈を参照されたい。

## 九 結語

以上、慶滋保胤の六波羅蜜寺結縁供花会詩序について、概観した。撰述時期について奈良弘元は、寛和元年（九八五）三月か、保胤が出家する翌二年の三月と推測する<sup>①</sup>。ただし、前述の通り開講以来八九年というのは、白居易「与三元九書」に基づく文飾で、ここまで厳密に時期を特定することはできない。もちろん、出家前の数年間に絞られることは間違いないだろう。

本詩序全体を分析すると、第二段破題部分は勸学会詩序群と比べ、複雑な文飾を排除したものになっている。他の段落もそのように見えるが、実は第一段と第三段は、典拠を踏まえ、しっかりと造り込まれていることを明らかにすることができた。ただしその範囲は、ほぼ『法華経』と『法華玄賛』、そして白居易の詩文にとどまるものである。したがって、あらゆる文献を博搜して、徹底的に文飾に凝ったといった性格のものではない。おそらく保胤は、短時間のうちに、自家薬籠中の物とする上記経論や白居易詩文を使いながら、撰述したものである。

本詩序では、供花会を勸学会・極楽会と対比する。極楽会の実態は、他に史料がなく未詳であるが、勸学会についてはかなり明らかになってきた。本講会の参列者は、勸学会に集った文人と同じような顔ぶれであったことが想像できる。講師となった僧侶については、南都北嶺の高僧を囑請したらしく、比叡山の若手僧侶中心の勸学

会とは宗派や階層が異なっている。本詩序は、六波羅蜜寺供花会の盛儀を伝える、唯一と言ってよい文献である。これを丁寧に読み込むことによって、これまで指摘されていない、いくつかのことを闡明できた。今後、慶滋保胤をめぐる宗教と文学のかかわりについては、さらに研究を重ねる所存である。

〔附記〕 小稿は、二〇一一年九月三日、中国西安市西北大学萃園賓館において開催された、和漢比較文学会第四回特別例会（特別研究発表会）において、「慶滋保胤六波羅蜜寺供花会詩序考」として発表したものを、論文として成稿したものである。また小稿は、平成十八～二十一年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C）「大江匡房の思想研究」、同平成二十三～二十六年年度「聖廟文学」の思想―平安朝文人貴族の天神信仰―における研究成果の一部である。

## 注

- （一）勸学会ならびに後述する白居易詩文との関係について、近年の吉原の研究成果は以下の通り。吉原浩人「慶滋保胤勸学会詩序考―白居易との関連を中心に―」（吉原浩人・王勇編『海を渡る天台文化』勉誠出版 二〇〇八・一二）、同「慶滋保胤「何処堪避暑」詩序詠註―白居易詩文摂取の方法（二）―」（『日本思想文化研究』第二巻第一号 二〇〇九・一）、同「慶滋保胤「晩秋過參州葉王寺有感」詩序詠註―白居易詩文摂取の方法（二）―」（『水門―言葉と歴史―』第二二号 二〇〇九・四）、同「紀齊名勸学会詩序詠註」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第五五輯第一分冊 二〇一〇・二）、同「高階積善勸学会詩序考―白居易詩文と天台教学の受容―」（高松寿夫・雫雪艶編『古代日本文学と白居易』勉誠出版 二〇一〇・三）、同「紀齊名勸学会詩序考―十五日開筵の意義と白居易の仏教思想―」（『水門―言葉と歴史―』第二二号 勉誠出版 二〇一〇・四）、同「大江以言擬勸学会詩序詠註」（『早稲田大学大学院文学研究科紀

要』第五六輯第一分冊 二〇一・二)、同「大江以言擬勸学会詩序考—『法華経』の受容と白居易—」(『東洋の思想と宗教』第二八号 二〇一・三)、同「慶滋保胤『蔚然上人入唐時為母修善願文』考—(林雅彦・小池淳一編『唱導文化の比較研究』岩田書院 二〇一・三)、同「神として祀られる白居易—平安朝文人貴族の精神的基盤—」(河野貴美子・張哲俊編『東アジア世界と中国文化—文学・思想にみる伝播と再創—』勉誠出版 二〇一・一)。

(2) 吉原浩人「慶滋保胤六波羅蜜寺供花会詩序訳註」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第五七輯第一分冊(二〇一・一))。

(3) 空也については、堀一郎『空也』(吉川弘文館 一九六三・六)、石井義長『空也上人の研究—その行業と思想』(法蔵館 二〇〇二・一)、同『空也—我が国の念仏の祖師と申すべし—』(ミネルヴァ書房 二〇〇九・二)などの専著と、小林(平林)盛徳『空也と平安知識人—『空也誄』と『日本往生極楽記』弘也伝—』(『書陵部紀要』第一〇号 一九五八・一〇)↓「聖と説話の史的研究」吉川弘文館 一九八一・七再収)、小原仁『文人貴族の系譜』(吉川弘文館 一九八七・一二)、小原仁「源

為憲と六波羅蜜について」(小島孝之・小林真由美・小峯和明編『三宝絵を説む』吉川弘文館 二〇〇八・二)など、多数の論文がある。

(4) 本文は、図書寮叢刊『伏見宮家九条家旧蔵 諸寺縁起集』(宮内庁書陵部 一九七〇・三)に拠る。論文に、井上和歌子『空也誄』から『六波羅蜜寺縁起』へ—勸学会を媒体にした一著作の再生産—」(『名古屋大学国語国文学』第九二号 二〇〇三・七)、同「勸学会と文章制作について—文学作品制作の場としての勸学会を考えを為に—」(『仏教文学』第二八号 二〇〇四・三)などがある。

(5) 句題詩とその詩序の規則については、佐藤道生編『句題詩研究』(慶應義塾大学出版会 二〇〇七・六)など参照。

(6) 慶滋保胤「勸学会所牒三州刺史館下」(『本朝文粹』巻十二「三八一」)、「勸学会所、欲被故人党結同心合力建立堂舎」状(同巻十三「三九八」)。後藤昭雄『本朝文粹抄二』(勉誠出版 二〇〇九・二)参照。

(7) 「法華八講縁起」は、護国寺本「諸寺縁起集」所収。二〇一〇年四月十日に開催された、早稲田大学日本宗教文化研究所・浙江工商大学日本文化研究所主催、平城遷

都千三百年記念国際シンポジウム「奈良時代の宗教文化」において、「南都結縁法華講会の濫觴と展開」と題して口頭発表したのが、未成稿である。この縁起に見える「第四十一年」「雨四花」「教理行果」「義」「退凡」「八珎」「身入」「幽微」の語は、『法華玄贊』に基づいていることを指摘した。

(8) 註(1)の紀育名・大江以言についての論文・註釈。

(9) 『本朝統文粹』巻十一。

(10) 『江都督納言願文集』巻一所収。訳註は、吉原浩人『大江匡房『白河院金字一切経供養願文』訳註』(二〇〇八年国際シンポジウム報告書 仏教声楽に聴く漢字音—梵唄に古韻を探る—) 二松学舎大学二十一世紀COEプログラム 二〇〇九・三) 参照。

(11) 『賦賦』については、波戸岡旭「白居易『賦賦』考」(『國學院中國學會報』第四二輯 一九九六・一二) ↓「宮廷詩人菅原道真—『菅家文章』『菅家後集』の世界—」笠間書院 二〇〇五・二) 参照。

(12) 註(1)の紀育名についての論文・註釈。

(13) あと一例は、「歎<sub>レ</sub>老三首、其三」(『白氏文集』巻十「〇四五五」)に、「但驚<sub>二</sub>物成長<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>覺<sub>二</sub>身衰暮<sub>一</sub>」とある。嬰子の成長の早さに比べ、自らの老い衰えるさまに

は気付かないものだという。

(14) 註(1)の慶滋保胤の勸学会詩序についての論文。

(15) 『大正新脩大藏經』巻三四—五下。

(16) 奈良弘元「極楽会」をめぐって」(『日本大学文理学部人文科学研究所研究紀要』第六三号 二〇〇二・一)。

# A Study on Yoshishige no Yasutane's Verse Prelude to Rokuharamitsuji *Kuge-e*: A Textual Analysis of its Relation to the Verse Prelude to *Kangaku-e*

YOSHIHARA Hiroto

This study closely examines the prelude in verse composed by Yoshishige no Yasutane on the occasion of the *Kechien Kuge-e* ceremony. In the middle of the *Heian* Period, this Buddhist service was observed every March at the Rokuharamitsuji Temple and it included the study of the *Hokke Hakko*. On one such occasion, Yoshishige no Yasutane raised a question before the participants concerning why the *Kuge-e* did not include an opportunity to praise Buddha, while both the *Kangaku-e* and *Gokuraku-e* did so in the form of verse following the lectures on the Buddhist sutras. It is said that Yasutane's proposal was supported by the unanimous agreement of the participants, and a gathering for reading and appreciating verse poetry was held.

Yoshishige no Yasutane took his subject from a well-known verse sequence in the *Hoben-bon* of the *Hokke-kyo* which says that even a person of low morals is capable of pursuing the way of Buddha if he goes even once to a stupa shrine and incants praise of the Buddha. This study aims to examine the ways in which Yasutane composed verses for the *Kuge-e* by focusing on how he developed subjects taken from the *Hokke-kyo* and analysing other source texts which are incorporated into the whole of his verse prelude.